イルミネイション

鳥山憂

みなさんこんにちは。「知られざるいきもの　これも、いきもの」のお時間です。

本日紹介するのは「イルミネーション」。今日はゲストに、イルミネーションの生態に詳しい都立光照（こうしょう）大学准教授の加賀谷逸輝（かがやいつてる）先生にお越しいただきました。加賀谷先生、本日はよろしくお願いいたします。

さて、もうじきクリスマスというこの時期になると、イルミネーションで街中が美しく、華やかに彩られますよね。でも、電気で光るのですから、とても生き物とは思えないのですが。

……なるほど、電気を通すことで発光する性質があり、それを利用されて観光業に使われている、と。イルミネーションは、光りたくて光っているわけではないのですね。

イルミムシ、通称イルミネーションは十六世紀のドイツで発見され、明治時代に日本へ持ち込まれた外来種だとされています。外来種ということは、日本在来の生態系に影響はなかったのでしょうか。

……ふむ。……なるほど、それなら安心ですね。たしかに他の生物を捕食しない、動かない生き物となれば、二十一世紀になってはじめて生物だと判明したというのも頷けます。

……たしかに、今の説明だけを聞くと、ムシというより植物に近いように思えますね。……なるほど、光合成をしないから。光は生み出しているわけですが（笑）。

しかし、年々街中のイルミネーションは増えているように思うのですが、イルミムシたちはどのように繁殖しているのでしょうか。

……

……あー、なるほど。

イルミネーションあるところにカップルあり、とは昔からよく言われますが、あれはイルミネーションの策略だったのですね。

たしかに、イルミネーションのそばで長居をするのはつがいの男女ばかりですものね……イルミネーション、したたかな生き物ですね（笑）。

ああ、そういえば私も学生時代、近くにイルミネーションの名所があったのですが、「カップルであそこに行くと別れる」という噂が流れていたのを思い出しました。まあ、私には縁のない話だったのですが……もしかすると、それもイルミムシのせいだったのかもしれないですね。

ところで今、市町村によってはイルミネーションを

大々的に宣伝したは良いものの、イルミネーションが増殖しすぎてしまい倉庫を圧迫している、電気代がかさんで赤字になりかけている、といった問題が起きつつあるようです。このところ、先生はどうお考えでしょうか。

……

……

ええ、確かにイルミムシは生物ですから、不用心に殖やしすぎた職員らの責任もあると思います。

……

……なるほど、元々イルミムシは生息数も少なく、食物連鎖カーストの最下位に位置する生物であったため、問題は起きなかったと。

イルミネーションの増殖は、餌が餌ですから、見に来る人々を規制でもしない限り止まらない。今すぐ規制を始めないと手遅れになる……

しかし先生、イルミネーションはもはや地域の欠かせない財源、伝統と化しつつあります。今からの規制は現実的ではないかと……役所も市民も、きっと反対されるのではないでしょうか。

第一、今までが大丈夫だったなら、そんなにすぐ問題が起こるなんて考えられるのでしょうか。徐々に規模を減らすなどすれば、そんなに大事にはなり得ないのではないかと、私などは思います。最近は環境に悪いなどといった批判意見もありますし、それにかこつけるなどして――

……はい、そうですね。可能性は念頭に置く必要があると思います。

では、そろそろお時間が来たようです。加賀谷先生、本日はありがとうございました。

「知られざるいきもの　これも、いきもの」、また次回お会いしましょう。さようなら。

＊　＊　＊

「ありがとうございました」

きわめて建前的な一礼をして、加賀谷とかいう教授が不貞腐れた顔でスタジオを出ていく。ドアが閉まって数秒後、私含めた出演者、収録スタッフは全員で大きくため息をついた。それを皮切りに、誰からともなく口々に彼への悪態がこぼれ出した。

「オカルト番組も楽じゃないよな。ああいう偏屈ジジイ相手にご機嫌取らなきゃいけないんだから……はあ、頭が痛くなるよ」

「イルミネーションが虫、って……そんなこと思いつけるの、逆にすごいと思いますよ。小説家になればいいのに」

ハハハハ、とスタッフたちの笑い声が響く。だいたい、

光照大学なんて名前も聞いたことがない。都立大学らしいが、どんなFラン大学なのだろうか。
収録はその流れで解散となり、私も今日の仕事はこれで終わりなので、さっさと帰路につくことにした。はけていく出演者たちに挨拶をして、控室に帰ろうとすると、
「倉野さん、お疲れ様っす」
駆け寄ってきて軽く頭を下げたのは、芸人の星川きらお君だった。もちろんこれは芸名で、本名は星川光男（てるお）。そんなに変わらないんじゃないか、というのは禁句らしい。
「あら、お疲れ様。星川君も収録終わり？」
「いえ、いま休憩中なんすけど。スタジオ隣だったし、ちょうど上がりっぽい声聞こえたんで」
そう言って人懐っこそうな笑みを浮かべる星川君。彼は今ブレイク中の若手芸人で、私が出演する朝のニュース番組で彼がレギュラーに抜擢されたことをきっかけに、懇親会などでよく話すようになった。お互い不思議と気が合ったようで、そこからプライベートでも時たま交流がある。
「そう。私はこれから帰るところだから、収録頑張ってね」
「あっ、待ってください倉野さん」
スタジオを出ようとした私を、星川君はどこか必死そうな顔で引き留める。
「あの、今日……倉野さん、誕生日っすよね」
「……えっ」
私が呆気にとられて言葉を詰まらせたので、星川君は慌てて面前で手をばたばたと振った。
「ち、違いましたっけ？　すんません、勘違いで」
「あ、いえ、違うの。私の誕生日なんて、覚えてくれてる人、滅多にいないから……驚いてしまって」
私が弁明すると、彼は胸を撫でおろして「よかったあ」と息を吐く。芸人らしいとでも言うのか、感情の動きが激しい人だ。
「……で、私の誕生日がどうかしたの？」
「あ、そ、そうだ。ひとまずお誕生日、おめでとうございますってことと」
そう言った彼の次の言葉は、なかなか出てこなかった。なんども体を縮こませたり、頭を掻いたり、手をもじもじと動かしたりしている。それが見ているだけでじれったくなった私は、わざと咳払いをした。星川君の肩がピクッと上がり、とうとう彼が口を割った。
「……あの、今日の晩ご飯、ご一緒にどうですか……！」
私はまたも呆気にとられた。あれだけ時間をかけたのだから、もっと重大な告白をされるものだと身構えていたのだが。
まあ、その程度なら断る道理もないと思った。

「ええ、構わないわよ。八時くらいでいいかしら」
「……！　は、はい！」
星川君は目をキラキラさせて、ミシンの針を刺す動きのように高速で頷く。
「じゃあ、詳しいことはまたメッセージ送りますんで！よろしくお願いしまっす！」
そう言い残し、彼は颯爽と隣のスタジオへ戻っていった。一方の私も、急な誘いではあったものの、満更でもない気持ちを抱えていた。

華の女子アナ、とはよく言われるが、私はこれといった華のないアナウンサーだった。バラエティー系の明るく可愛い、ふわふわとした女子アナが人気を博しているのに対し、私は真逆だった。お堅く地味で、バカ真面目。「安定感がある」「絶対に不祥事を起こさなさそう」といった理由から上からの支持はあるものの、テレビの主たる視聴者にはウケが悪い。いや、ウケが悪いというよりは、「記憶に残らない」。あの人気情報バラエティーで報道パートを務めているアナウンサー、あの人の名前を知っているかと街頭調査でもしたら、きっと九割は知らないと答えるだろう。
昔から、自分の影が薄いことはよく理解していた。縁の下の力持ち、陰で頑張る人、裏方、決して主役気質ではない人間。
そう評価されるのには慣れていたし、自分もそれを受け入れていた。自分は他人を引き立てるのが仕事であり、注目されることを期待してはいけないのだと。
だからだろうか、星川君のような「主役」気質の人間から、こんなに自分に興味を向けてもらえるなんて、考えもしなかった。
彼にとっては、共演者の誕生日を覚えていることくらい当たり前なのかもしれない。でも、私にとってはそれが、どうしようもなく嬉しかったのだ。
告白でもされたら、どうしようか――
不躾にも、そんな思考が頭を過ぎる。私は頭を振って、邪な妄想を追い出す。
今をときめく人気芸人が、私なんかに靡(なび)くはずがない。きっとただの友達心、あるいは同情だ。自分に好きになってもらえるだけの価値があるなんて、思い込むな。
「……はあ」
楽しみと不安と、ある種の諦めが同居したわだかまりが、胸の中でくすぶっていた。
星川君からの連絡を控室で待っていたのだが、彼のいるスタジオからの声がこちらまで届くほどに収録は盛り上がっていて、終わる気配もなかった。私は渋々荷物を

まとめ、一旦自宅へ帰ることにした。

＊　＊　＊

彼からのメッセージが届いたのは、私の収録終わりから三時間ほど経ち、午後六時を回ったころだった。
『倉野さん！　よかったら、晩ご飯の前にイルミネーションでも見に行きませんか！？』
普段の星川君を思わせるハイテンションな感嘆符とともに、レストランとイルミネーションスポットの地図リンクが送られてきた。恋愛関係には疎くとも、こういう季節イベントの有名スポットはニュースで取り上げることも多いので、それなりには知識がある。その公園も、ニュースで何度も取り上げてきた有名な場所だった。中経やリポートを繋ぐのは、絶対に私ではなかったが。
特に異論もなかったので、『いいよ』と素っ気なく返信した。ふと、数時間前の収録のことが脳裏に浮かんできたが、さして気にも留めなかった。せいぜい、変な偶然もあるものだな、と思うくらいだった。
恋人じゃあるまいし、と普段の格好で行こうと思ったのだが、レストランのリンクを踏んで、これは普段着で行ってはいけないと思い直した。あまりお洒落な服は持っていなかったが、自分にできる最大限のドレスコードを整え、化粧も普段より念入りにした。眼鏡を仕舞い、大事な日のためだけに作っていたコンタクトも入れた。
出来上がった自分の姿を見て、つい「やってしまった」と呟いてしまった。気合を入れすぎて笑われるかもしれない……が、今からやり直すには時間が足りなかった。笑われるより遅刻をするほうが恐ろしいので、不安には思いつつ家を出た。夜六時の空気は、想像よりも暗く冷え込んでいた。

待ち合わせより十五分早く着いたのに、その場には既に星川君がいた。普段の芸人姿からは想像もできないような、フォーマルなジャケットに身を包んでいた。
「お待たせ、星川君……」
こちらが声をかけると、彼は慌ててスマホから顔を上げた。「いえ、今来たところです倉野さ……」しかし、彼は台詞を途中で止めて、はっとした顔で私をまじまじと見つめる。
「……どうかした？」
訝かしんだ私が尋ねると、彼は慌てて首を振った。
「い、いえ！　何でも……」
大きな声で否定した後、縮こまって言い直す。「……その、倉野さん、いつもと雰囲気違うんで……驚いちゃって」

「ああ、高そうなレストランだったから、ドレスコードを整えなくちゃと思って……やっぱり、変だったかしら」
「いえ！　その……めっちゃ素敵っす！　可愛いし……」
目の前で手をぶんぶんと振る星川君を見て、そのあまりの必死さが可笑しくなり、つい笑いが漏れてしまった。
「……ふふ、ごめんなさい。それじゃあ、行きましょうか」
取り繕うように、自分から歩を進める。自分の中に、余計な気が湧いてくる前に……と言ったほうが、正しかったか。
さすがは都内有数のイルミネーションスポットなだけあって、どこもかしこもカップルで一杯だった。そのためか、ハートをかたどった電飾が多く、私は場違い感で頭がクラクラしそうだった。
「待ってくださいよ倉野さん、写真撮っていきましょうって」
ずんずんと歩く私を、星川君が時々で呼び止めるという、周囲のカップルとはちぐはぐな形での観光となっていた。私も彼も、普段メディアで露出する姿とは正反対の格好をしているからか、誰かに気付かれる様子もない。
そんな私の足を、彼の声なしで止めたものがあった。無数の電飾の中でも一際大きく輝かしい、大木に飾り付けられたイルミネーション……いや、イルミネーションが大木を形作っている、というほうが正しいように思われた。クリスマスツリーのようだが、そこに付けられている電飾の数と彩りは、他の追随を許さなかった。飾りはよく見ると一つ一つがこれも電飾のようで、球体状となって赤や緑に光っている。その嫌でも目を引くような規模から、間違いなくこの公園の展示の目玉なのだろうと思った。
「……倉野さん！」
声は前方から聞こえた。私がツリーに目を奪われているうちに、星川君が私を追い越していたらしい。不思議なことにその瞬間、そのツリーの前には私と彼以外の何者も存在しなかった。
「……ずっと言おうと思ってたんすけど、こういう時でもないと、中々言えなくて……」
私の顔をちらちらと見ては逸らし、また見て……を繰り返し、星川君は息を吸ったり吐いたりしている。見ているこちらがソワソワしそうだ。
そう。なぜか彼が今のように、焦れったい態度をとっているのを見ていると、心の奥がざわざわとして落ち着かなくなる。それは今に始まったことではなく、具体的にはあの……朝の情報バラエティ番組の、懇親会の後あたりから。
そんな気持ちを抱くようになったのはそれが初めてだったが、決して急かしたいとか、苛々しているような感情ではなく……微笑ましいとか、愛らしいとか、それに

近しいものだと感じていた。自分でも、その正体がなんなのか、未だにはっきりしていないのだが。

「……その、僕」

唇を震わせて、ゆっくりと間をとって話し出す。テレビや劇場といったステージに立ち、堂々と明るく笑いを取る彼の姿とは、正反対のようにも思えた。

「……っ、倉野さんの、ことが」

心臓が跳ねるように高鳴った。そこまで言われれば、大抵の人間は――どんなに鈍かったとしても――察しがつくというものだ。途端に、目の前の彼と同じくらい、背筋が伸びて頬が紅潮する。

生まれて初めて、その言葉を聞くかもしれない。

私は急に、自分がスポットライトを当てられた、主演女優であるかのような錯覚に陥った。

誰かからの好意が、こんなに嬉しいものだとは知らなかった。はっきりと聞く前から、驚きと嬉しさで、わけもなく涙が溢れてきそうになった。

私はとっさに目を瞑った。何を言われる前から涙を流しては、彼の告白が台無しになると感じたからだ。私は女優ではないが、それくらいの舞台の作法は弁えているつもりだった。

ゆっくりと動く彼の口から、次の言葉が零れるのを、今か今かと待ちわびた。実際には一秒とないはずの間が、まるで餌を前にしてお預けを食らっているかのように思えた。私は飢えた狼のように、その次を待ち焦がれた。

ぴしゃり。

しかし、言葉の前に私に降りかかったのは、生温くどろっとした液体のようなものだった。

香水に混じって漂う不快な匂いに、私は目を開いた。

開いてしまった。開くべきではなかったのに。

目の前の彼が、言を発するのをずっと待っていた。

それなのに。

もう彼の口から、その言葉は出てこないだろうとわかった。

「……あ」

たった二言、それを言ってくれれば良かったのに。

彼から放たれたのは、そんな間の抜けた、呆然とも、感嘆とも、呻きともわからぬような、意味のない一言だった。

「……え」

到底、理解ができなかった。

目の前にいたはずの星川君、星川光男が、

電飾（イルミネーション）に、腹を貫かれ、大木に引っかかっている。

呆然と大木を眺めていると、彼の引っかかった近くの枝が、わらわらと彼の身体に群がりはじめた。

それは枝というより触手のようで、見る見るうちに電飾が彼を覆い尽くし、電飾が丸く形づくられたボールのように固まった。

そして、周りと同じ白色の光だったはずの絡みついた電飾は、赤色の光を放ちはじめた。

「……ああ」

直感的に理解できた。あの赤は、捕食中の色なのだ。

自分でも、なぜこんなにも冷静に頭が動いているのだろう、と疑問に思った。そして、日中のある収録のことを思い出した。

「……イルミネーション」

なんだ。あの教授の言っていたことは正しかったのか。

しかし、あの教授もイルミムシが人を捕食するとは言っていなかったじゃないか。ただ、人の――

――人の精気を餌にする、としか。

ああ。

悲しいことに、鈍い私にもそれが理解できてしまった。

私が彼に欲しいと望んだ言葉も、彼の口から出たところで、それは建前だったのだろうと分かってしまった。

言い換えれば、今この大木に囚われている人間たちは、皆そういう人間だったのだろう。イルミネーションに群がる、哀れな虫どもが、イルミムシなるものに捕食されていったのだ。

……しかし。

彼の入った繭玉を見て、周りのものよりそれが一回り小さいことに気付く。

もしかするとあの中には、皆つがいで入っているのだろうか。

私には分からなかった。

哀れな虫になって捕食されることと、哀れな虫にもなれず一人で捕食者から逃れることの、どちらが幸せだったのだろうか――

頬に付着した彼の血液を舐めて、私は顔をしかめた。